シーザーの登場

依　田　義　丸

Shakespeare の作品群を初期から後期まで丹念に辿っていくと、この劇作家が無駄なくその劇作経験を積み上げていることに気づく。それも、観客の支持がなくては成り立たない演劇というジャンルの中で、自分の思いのままに劇作の対象を選ぶことができたわけではなく、常に時代の要請と妥協しながら劇作を進めざるをえなかっただろうことを考えると、シェイクスピアがいかに劇作家としての強靭な資質をそなえていたかを思い知らされる。本論の主な目的は、*Julius Caesar* における Caesar の登場場面を取り上げ、それが先行する劇作品 *Titus Andronicus* の主人公の登場場面を下敷きとして築かれていることを示しながら、演説からより複雑な対話へと発展させて場面づくりがなされている様子を具体的な対話を吟味することによって明らかにするのが目的である。

『ジュリアス・シーザー』でタイトル・ロールのシーザーは第 1 幕第 2 場に登場する。しかし先行する場面は 77 行と比較的に短いので、登場は開幕からまもなくという印象を与えている。開幕の場面では、以前権力をもっていた “Pompey” の一族を破って勝利の凱旋をする新しい権力者のシーザーを迎えようと出かけてきたローマ市民たちを、その権力移譲を好ましく思っていない護民官の Flavius と Murelles が諌めている。利害を異にする市民と護民官は、最

初衝突の危険性を観客に感じさせるが、結局は、護民官の説得で市民たちは、おとなしく追い返されている。この第1場の対立とその竜頭蛇尾的な終わり方は、すべて次に控えているシーザーの登場を引きたてるために用意されたもののようにみえる。実際、舞台がきれいに掃除されるのを待ったようにして、たくさんの従者を引き連れたシーザーが堂々と登場してくるのである。実は、このシーザーの登場に至る場面展開とよく似たものをもっているのが、『タイタス・アンドロニカス』の主人公タイタスの登場である。

タイタスの登場は場面分けからすると第1幕第1場で行われているが、実際には、それに先行した63行からなる短い場面をもっている。そして、その場面で提示されている内容は、空位になったローマの皇帝の地位をめぐって、先帝の長男 Saturninus と次男 Bassianus がそれぞれの支持者を引き連れて対立するというものである。ここでも、両派は激しいぶつかり合いを観客に予測させるが、現実には、タイタスの弟で護民官でもあるマーカスが出て、ローマ市民がゴート族を打ち破って凱旋するタイタスを新皇帝に推挙したと述べることで、先帝の二人の息子たちも選ばれたタイタスに敬意を表して鋒を急に納めることになっている。この急な状況のまとめ方も、シーザーの場合と同じように、次のタイタスの登場を引きたてるためのものになっている。『タイタス・アンドロニカス』では、このあと CAPTAIN が登場してタイタスの凱旋の先触れをすることになっているが、それはわずか6行（64–69）であり、これを無視すると、事実上つづいてすぐに、主人公のタイタスがたくさんの捕虜や味方の者たちを引き連れて、これまた堂々と登場することになっている。

このように、シーザーの登場に先行する場面は、タイタスの登場に先行する場面と似通っているが、登場してくる二人の性格や言葉使いがこれまたきわめて似通っているのである。シーザーの登場に関わる対話を吟味するのに先立って、まずは登場したタイタスの演説を卜書きの部分からみることにしよう。

Sound drums and trumpets, and then enter two of Titus' sons［LUCIUS *and*

MUTIUS]. *After them, men bearing* [*two*] *coffin*[*s*] *covered with black; then two other sons* [QUINTUS and MARTIUS]. *After them,* TITUS ANDRONICUS, *and then* TAMORA *the Queen of Goths and her sons,* [ALARBUS,] CHIRON *and* DEMETRIUS, *with* AARON *the Moor, and others as many as can be. They set down the coffin*[*s*], *and Titus speaks*

TITUS Hail, Rome, victorious in thy mourning weeds! 70
Lo, as the bark that hath discharge his fraught
Returns with precious lading to the bay
From whence at first she weighed her anchorage,
Cometh Andronicus, bound with laurel boughs,
To re-salute his country with his tears, 75
Tears of true joy for his return to Rome.
Thou great defender of this Capitol,
Stand gracious to the rites that we intend.
Romans, of five-and-twenty valiant sons,
Half of the number that King Priam had, 80
Behold the poor remains alive and dead!
These that survive let Rome reward with love;
These that I bring unto their latest home,
With burial amongst their ancestors.
Here Goths have given me leave to sheathe my sword. 85
Titus, unkind and careless of thine own,
Why suffer'st thou thy sons, unburied yet,
To hover on the dreadful shore of Styx?
Make way to lay them by their brethren.

(I. i. 70–89)[1]

太鼓とラッパの音。次にタイタスの二人の息子［ルーシアスとミューシャス］登場。つづいて黒い布で被われた棺をかつぐ二人の男、他の二人の息子［クウィンタスとマーシャス］登場。そのあとから、タイタス・アンド

1　シェイクスピアの作品からの引用はすべて、ニュー・ケンブリッジ版による。

ロニカス、ゴート人の女王タモラとその息子［アラーバス］、カイロン、ディミートリアス、ムーア人エアロン、他の出来るだけ多くの者たち登場。棺がおろされ、タイタスが話す。

タイタス　やあ、喪服を着て勝利を祝うローマよ！
見るがいい、船荷をおろした帆船が
高価な船荷を積んで
最初に錨を揚げた港へ帰ってくるように、
アンドロニカスは月桂樹の枝を頭に巻いて帰国した、
再び母国に涙をもって、
ローマに戻った嬉しさの真の涙をもって挨拶するために。
この神殿の偉大な守護神よ、
我々の行なわんとする儀式に恵みを与えよ。
ローマ人たちよ、プライアム王の王子たちの
半数である二十五人の勇敢な私の息子たちのうちで、
残った者は生者死者合わせてもこのわずかだけだ。
生き残った者には愛で、
私が最後の安らぎの地へ連れ帰った者には、
先祖の者と一緒に埋葬することで報いよ。
ゴート人もやっと私の剣を納めさせてくれた。
タイタスよ、おまえは家族には薄情で無頓着であったが、
おまえの息子たちを埋葬せずに、
冥土の川の恐ろしいほとりをさまよわせてよいものか。
墓を開き彼らをその兄弟たちのそばに横たえるがいい。

タイタスが、開口一番に呼び掛けているのは、「ローマ人たち」（‘Romans’）ではなく、「ローマ」（“Rome”（70））になっている。これは、自分がゴート人を打ち破って帰ってきたローマ全体の英雄であることをタイタスが最初から意識し誇っていることを暗示している。また、その「ローマ」を修飾している語句“victorious in thy mourning weeds”は、戦争の勝利の陰にいるたくさんの犠牲者への心遣いのように聞こえるが、ほんとうのところは、やがて明かになるよ

うに、タイタスが戦死した息子たちのための埋葬の個人的な儀式を公の凱旋の場で行おうとしていることを伝えている。そうした姿勢にうかがえるタイタスの奢りは、つづく部分（71–76）にも引き継がれている。まず、凱旋した自分に注意を向けさせる命令口調（“Lo, . . .”（71））は、主人公の高慢な態度を感じさせる。これに加えて、自らの凱旋を描く、宝物を満載して港に戻ってきた船の帰還の比喩（71–73）、自らの頭上に被せられた月桂樹の冠に自ら触れている厚かましさ（74）、更には極めつけとして、凱旋した自分を三人称的に “Titus” としている表現、これらには、凱旋する自らの偉業を客観的事実としてタイタスが意識していることが出ている。次の二行（77–78）でも、本来なら腰を低く神殿の守り神に恵みを願うところで、タイタスが再び使っている命令口調は、自らを神の高さに置きかねない傲慢さを暗示している。同様の傾向は、戦死した息子たちの個人的な埋葬に向けて話しはじめている後半の部分にも認められる。王族の “King Priam” の例を比較に使って元の子沢山を表現している（80）し、今や残った息子（戦死した者と生き残った者と合わせて）の数が僅かである事実に注意を向けさせるのにやはり命令形（“Behold. . .”（81））を使っている。それに、以前と同様、それを「ローマ」（“Rome”（82））全体に対して、生き残った息子に対する称賛を強要するまでしている。主人公の高慢さや奢った姿勢が、このように、一貫して伝えられているので、死んだ息子を先祖の墓に眠らせる栄誉を求めるのに（83–84）、また、ゴート人との戦争が終結したことに触れるのに（85）、はじめて一人称（“I,” “me”）が使われても、それらもかえってタイタスの高すぎるプライドを伝えることになっている。息子たちの埋葬に移る部分でも、自らに三人称で呼び掛けたり（“Titus”（86））、道を開けて息子たちの埋葬をさせるように命じているところには、これまでと同様のタイタスの奢りが感じられる。

このように、シェイクスピアは『タイタス・アンドロニカス』において、はじめて登場するタイタスの凱旋の演説で、命令口調や自らに三人称を使う修辞、更に、公の場を個人的儀式に使う姿勢に、タイタスの奢りや高慢さを表現させ

ているが、そこで試した人物の性格表現を、『ジュリアス・シーザー』のシーザー登場の対話に巧みに持ち込んでいる。その様子と平面的な演説表現を立体的な対話表現に発展させている模様を、以下で調べてみよう。

Enter CAESAR, ANTONY *for the course,* CALPURNIA, *Portia, Decius, Cicero,* Brutus, Cassius, Casca, a SOOTHSAYER, [*a great crowd following*]; *after them Murellus and Flavius*

CAESAR Calpurnia.
CASCA Peace ho, Caesar speaks.
CAESAR Calpurnia.
CARPURNIA Here, my lord.
CAESAR Stand you directly in Antonio's way
When he doth run his course. Antonio.
ANTONY Caesar, my lord.
CAESAR Forget not in your speed, Antonio,
To touch Calpurnia, for our elders say
The barren, touched in this holy chase,
Shake off their sterile curse.
ANTONY I shall remember.
When Caesar says, 'Do this,' it is performed.
CAESAR Set on, and leave no ceremony out.
SOOTHSAYER Caesar!
CAESAR Ha? Who calls?
CASCA Bid every noise be still — peace yet again!
CAESAR Who is it in the press that calls on me?
I hear a tongue shriller than all the music.
Cry 'Caesar!' Speak, Caesar is turned to hear.
SOOTHSAYER Beware the Ides of March.
CAESAR What man is that?
BRUTUS A soothsayer bids you beware the Ides of March.

CAESAR　Set him before me, let me see his face.
CASSIUS　Fellow, come from the throng, look upon Caesar.
CAESAR　What say'st thou to me now? Speak once again.
SOOTHSAYER　Beware the Ides of March.
CAESAR　He is a dreamer, let us leave him. Pass.

(I. ii. 1–24)

シーザー、競争の身支度をしたアントニー、キャルパーニア、ポーシャ、ディーシャス、シセロー、ブルータス、キャシアス、キャスカ、占い師、[たくさんの群集]、最後に、マララスとフレイヴィアス登場。

シーザー　キャルパーニア！
キャスカ　静かに、シーザーがお話しだ。
シーザー　キャルパーニア！
キャルパーニア　はい、これに、皇帝陛下。
シーザー　おまえは、ちょうどアントニーの通るところに立つのだ、
彼が競争で走るときに。アントニー。
アントニー　何か、皇帝陛下。
シーザー　走っているときに忘れるな、アントニー、
キャルパーニアに触れることを、古老たちが言うには、
うまずめも、この神聖な競争で触ってもらうと、
不妊の呪いが落ちるという。
アントニー　きっと憶えておきます。
シーザーが「こうしろ」と言われたら、行われたも同然です。
シーザー　はじめるのだ、どの儀式も省くでない。
占い師　シーザー。
シーザー　ほう？誰が呼んでいるのだ？
キャスカ　どの音も静まれ、今一度静かに！
シーザー　群集の中から俺を呼ぶのは誰だ？
俺は聞いたぞ、どの音楽より鋭い舌が
「シーザー！」と叫ぶのを。話せ、シーザーが聞くぞ。
占い師　3月15日にご用心を。

シーザー　あれは何者だ？
ブルータス　占い師が3月15日にご用心とあなたに言っています。
シーザー　やつを俺の前に連れて来い、俺が会ってやる。
キャシアス　おいおまえ、群集の中から出てきて、シーザーにお会いするのだ。
シーザー　おまえは俺に何と言ったのだ？もう一度言ってみろ。
占い師　3月15日にご用心を。
シーザー　やつは夢をみているのだ、やつにかまうな。さあ、行こう。

ト書きでアントニーがしている競争の身支度に触れられている（*"for the course"*）ことで分かるように、農耕牧畜の神ルカパリアの祭りの行事として行われる競争の開始を宣言するために、シーザーが群集とお供の者たちを従えて登場したところである。そうした公の場にもかかわらず、タイタスがしていたのと同じように、シーザーは個人的な話題を持ち込んでいる。シーザーは妃キャルパーニアにアントニーがちょうど走る路に立つように言っている ── "Stand directly in Antonio's way / When he doth run his course."（3–4）。それに至るまでは、わずか2行であるが、シェイクスピアはそれを三人の台詞に振り割って対話を巧みに展開している。1行目では、Cascaの言葉を挟んで、シーザーに二度 "Calpurnia" と言わせている。このうち、シーザーがほんとうに妃キャルパーニアに話し掛けているのは、二度目の方であって、最初の「キャルパーニア」は、事実上、みんなを静粛にさせるキャスカの言葉（"Peace, ho, Caesar speaks."）を引き出すために使われているといってもよい。つまり、権力者シーザーの口から出る言葉は、どのような言葉であれ、まわりの者に注目され怖れられており、シーザー自身も自分の言葉をまわりの者に注目させ怖れさせるものとして発言しているということである。その意味では、最初のシーザーの呼び掛けとキャスカのそれに対する反応は、権力者に対して怖れを抱いているまわりの状況ばかりか、権力者がその威力をみせつける尊大な態度をも伝えていることに

なる。その上、キャスカが他の者に注意を向けさせようとしているシーザーの言葉が、妃を呼ぶという、たわいもない個人的な次元のものなので、本人の尊大な態度とまわりの者の怖れの姿勢に皮肉の色がかぶさることになっている。このようにシーザーがまわりの者たちの目を意識していることがわかると、妃に対して言われている、次につづく言葉も、同時にまわりの者たちにもシーザーが聞かしているように設定されているのがわかってくるだろう。キャルパーニアにアントニーが走るところに立つように言っているシーザーの命令口調は、主人としてばかりか皇帝としての威厳をみせつける態度をうかがわせる。それは、タイタスの場合に似て、えらぶるシーザーの性質を伝えるものとなっている。そうした態度は、この祭りの競争者に不妊を直してもらうために、アントニーにキャルパーニアに触るのを忘れないように念を押している命令口調にも現われている —— “Forget not in your speed, Antonio, / To touch Calpurnia, for our elders say / The barren, touched in this holy chase, / Shake off their sterile curse.”（6–9）。考えると、この要請はある意味で不必要なものである。なぜなら、キャルパーニアにアントニーの走る路に立つように命じたところで、アントニーに触ってもらうように言えばそれだけでよいからである。それを、シェイクスピアは、シーザーに、わざわざアントニーに対して直接妃に触れることを記憶しておくように命じさせている。いやそれだけではない、それに先立って劇作家は、アントニーを名指しさせ（“Antonio”（4））、そのアントニーをシーザーの前にかしずかせるやり取りまで挟み込んでいる（“Caesar, my lord.”（5））。そのようにして劇作家が観客に伝えようとしていることは明かである。すなわちそれは、シーザーが自分の命令に（それが今のようにたわいもない命令であっても）何者をも従わせられる存在であることをまわりにみせつけようとしているということである。そのことは、その命令を覚えておくことを述べたあとに、アントニーが言っている次の言葉 —— “When Caesar says, ‘Do this,’ it is performed.”（10）—— の実質的な意味によって、まわりからも裏打ちされている。もちろんのことこれ以外にも、アントニーの言葉はそれ自体の意味を伝え

ていることも確かである。まずそれは、シーザーを取り巻く者たちの盲目的な従属の姿勢を表している。更にはそれは、後の暗殺されたシーザーの葬儀における演説の場面で、シーザーを持ち上げた演説をして市民たちの支持をブルータスから奪うことになるアントニーの抜け目なさをその甘言にこめて観客に伝えているといえる。

シーザーは、あらためて行事の開始を命じている ── “Set on, and leave no ceremony out.”（11）それは、まずは、国の長として儀式を司る者の役割を果たしている言葉であるが、これまでの対話展開でシーザーの尊大さが印象づけられているので、この命令口調も、観客に同様の性質を感じさせている。いずれにせよ、シーザーの開始命令で場は公の行事の場となり、そこのいる人々は一斉に黙し、儀式的な緊張があたりを支配することになる。劇作家は、こうした沈黙と雰囲気をつくり上げた上で、絶妙のタイミングで占い師にシーザーに声を掛けさせている ── “Caesar”（12）。これに対するシーザーの最初の反応（“Ha?”（13））は、自分の命じた公の行事の進行を乱す声に対する苛立ちである。

次に、劇作家がシーザーに与えている言葉は、たとえば ‘Who are you?’ ではなく、“Who calls?” である。それは、自分に声を掛けた者への直接的な関わりを避けた客観的な問い掛けであり、自分を高いところに置いておこうとするシーザーの姿勢を伝えている。その大仰な物言いの威圧が、シーザーがはじめて口をきいたときと同様、まわりの者たちの怖れを代弁するように言われている、静粛を求めるキャスカの言葉（“Bid every noise be still ── peace yet again!”（14））を実質的に引き出している。シーザーのえらぶった態度は、群集が静かにさせられたときをみはからって述べられる次の言葉にも引き継がれている。シーザーの問い掛け（“Who is it in the press that calls on me?”（15））と、それにつづく陳述（“I hear a tongue shriller than all the music/ Cry ‘Caesar!’”（16–17））は、実際には、観客への情報提供という観点からは余分なものである。なぜなら、前者は、その前の問い掛けと同じものであるし、後者は、今起こったばかりの事を修辞的な修飾を交えて言語表現したものにすぎないからである。にもかかわらず、劇

作家がそれをあえて言わせているのは、市民からの声に常に耳を傾けようとする良き支配者である自分をシーザーが印象づけようとしている演技性を観客に感じさせるためだと思われる。つづくもったいぶった台詞（“Speak, Caesar is turned to hear.”（17））には、確かにわざわざ自分に呼びかけた声の方に向いてみせる演技性がうかがえるようにしてある。そして、ここには、タイタスの尊大な物言いを特徴づけていた、命令口調と自らについての三人称による表現の二つが同時に使われていることも注意しておく必要がある。また見逃してはならないのは、同じ言葉は、シーザーばかりか、そのまわりの者たちや群集、更には、彼らを見守る観客にも、占い師の言葉をきく態勢を取らせていることである。これによって、占い師の警告（“Beware the Ides of March.”（18））は、劇世界のシーザーを含めた人物たちと、劇外世界の観客の両者に印象的なものとなりえている。今度も、シーザーは自らの威厳を保つために警告した者がだれかを直接きくことを避けて、まわりの者へ、その問いを向けている —— “What is that man?”。その問いへの答えは、“A soothsayer bids you beware the Ides of March.”（19）であり、それを答えているのがブルータスである。まず、声の正体だけではなく、言われた内容を添えている丁寧な答えは、怖れられる権力者シーザーへ相応しいものとなっているが、同時に、それは、占い師の警告の言葉を繰り返し印象づけることにもなっている。また、その台詞がブルータスに振り割られていることによって、暗殺の日とそれへの警告がほかならない暗殺者の中心的存在に結びつくという劇的アイロニーがつくられてもいる。シーザーが次に、会うために占い師を自分の前に引き出すように命じている言葉にも、命令形が二度使われている上に、そのうちの一つが “Let me. . .” にしてあって、言う者のえらぶった調子が強調されている。今度は、シーザーの命令に応えさせられているのは、キャシアスである。その言葉 —— “Fellow, come from the throng, look upon Caesar.”（21）—— は、事実上シーザーの言葉を代わりになって繰り返したことになっているので、その二度の命令形の使用は、シーザーのそれを観客に思い出させる役割を果たしている。もちろん、それを言ってい

るのがキャシアスにされていることにも意味があって、暗殺の計画をすでに心にもち、その露見をもっともおそれるはずの人間が、その暗殺への警告をシーザーに言わせるために占い師を呼んでいる皮肉がつくられている。目の前にきた占い師に、シーザーは、警告の内容を問い、もう一度言うように命じている――“What say'st thou to me now? Speak once again.”（22）。それは、すでに聞かされていることをわざわざ繰り返す問いと、繰り返し話すことを命じる口調によって、これまで描かれてきた権力者としてのシーザーの姿勢をまた伝えていることは言うまでもないが、それと共に、占い師の警告（“Beware the Ides of March.”（23））をもう一度印象づける機会をつくっていることも注意すべきである。最後に、現実的でないことを述べていると決めつけ、占い師を残して立ち去ろうとするシーザーの言葉（“He is a dreamer, let us leave him. Pass.”（24））には、警告にも動じていない強い権力者であることをみせつける態度と、えらぶって聞こえる “let us. . .” を再び含む二度の命令形でシーザーの不遜さが伝達されている。

このように、シェイクスピアは、シーザーの登場を提示する対話に、タイタスの登場に際して行われた演説を下敷きにして構築している。具体的には、タイタスの奢りや高慢さを表すのに使われた命令口調や自らに三人称を使う修辞、更には、公の場を私的に使う傾向などを再び取り込んで、権力者シーザーの居丈高な尊大さを巧みに表現している。また、劇作家は、対話の立体的な特質を十全に駆使して、権力者を取り巻くまわりの者たちの反応を描いてもいる。そして、そうした人物たち次元の表現にとどまらず、劇作家は、占い師の警告を中心とした場面の効果を最大限に発揮させた上に、今後の劇展開への繋がりを暗示するところまで、劇表現の幅と奥行きを広げているのがわかる。

実は、『タイタス・アンドロニカス』の主人公に関わる表現が『ジューリアス・シーザー』の登場人物の描写に影響を与えたと思われる例がもう一つある。それは、後者の作品の主人公だと考えられるほかならぬブルータスである。最後に、このタイタスとブルータスの繋がりについてみておこう。

ブルータスついて誰もが思い浮かべるイメージは、その高潔さである。彼は、劇中で「高潔な」という形容辞を付与されて呼ばれることが多い。たとえば、キャシアスは、ブルータスに呼びかけているときに、盛んに “noble”（I. ii. 62）や同じ意味の “gentle”（71）や事実上同じ意味の “good”（51, 66）を添えている。もっとも、キャシアスは誘惑しようとしていることを忘れてはいけないし、これらの言葉はその意味に重要性を持たせずに、ただ形式的に名前にかぶせて使われることもよくみられるから注意が必要だが、キャシアスはブルータスの自己の高潔な性格への自負を逆手に取る誘惑戦術を使っているし、実際の劇展開の中のブルータスの行動や言動に接した観客は、そうした言葉がその性格表現にぴったりであることは誰しも納得することである。同じように、すでに吟味したように、タイタスも開幕直後からまわりの人物から「高潔な」（“noble”（I. i. 50, 253））や事実上同じ意味をもつ “good”（37）と形容されることが認められる。タイタスでは、そうした言葉を使う人物のそれぞれの利害を考慮しなければならないし、そのイメージは、凱旋の演説で示された高慢さによって若干の修正をほどこされているものの、基本的なところで彼が「高潔な」人間であることはこれまたどの観客も認めるところである。

「高潔な」ブルータスの性格は、本人の台詞自体にも感じられる。その最も目立った例の一つが、やはりキャシアスに誘惑される際にみられる “honour”（「名誉」）と “death”（「死」）についての次の言葉である。

If it be aught toward the general good,
Set honour in one eye and death i’th’other
And I will look on both indifferently.
For let the gods so speed me as I love
The name of honour more than I fear death.
（I. ii. 85–89）

もしそれが公共の利益のためになるのなら、
片方の目には名誉を、片方の目には死を置くがいい、

俺はその両方を、平然とみつめてやる。
神々の幸がありますように、
俺は死を恐れるよりも名誉を重んじるのだから。

実は、この「名誉」より「死」を重んじるというブルータスの信念の披瀝こそ、キャシアスにほんとうの誘惑に踏み出させる絶好の機会を与えているものなのである。キャシアスのこの直後の言葉をみるだけでもそれがわかるだろう。

I know that virtue to be in you, Brutus,
As well as I do know your outward favour.
Well, honour is the subject of my story:
I cannot tell what you and other men
Think of this life, but for my single self
I had as lief not be as live to be
In awe of such a thing as I myself.
(I. ii. 90–96)

ブルータス、俺はお前の中にその勇気があるのは知っている、
おまえの顔つきを知っているように。
そう、名誉こそ俺の話の主題なのだ。
俺にはわからない、おまえや他の者たちが
この人生をどう考えているか、だが俺個人としては、、
俺は死んだ方がいい、
俺自身のようなあんな人間を怖れるくらいなら。

ちなみに、“such a thing as I myself”（「俺自身のようなあんな人間」）とは、キャシアスのもくろむ暗殺の相手であるシーザーその人であることは言うまでもない。

ブルータスに認められる、その「名誉」さもなくば「死」という考え方はタイタスの言動にも色濃く現われている。その代表的な事例は、自らが推した新皇帝のサターナイナスに妃として所望された娘のラヴィニアを、婚約者のバッ

シエーナスや二人を支持する身内の者が連れ去ろうとする混乱の中でタイタスは息子の一人を切り殺しているところにみられる。自分が殺した息子の死体を先祖の墓に埋葬することを、タイタスははじめ認めないが、弟マーカスをはじめとした身内の者の懇願に屈して、それを仕方なしに承認する。次の引用は、その際のタイタスの台詞である。

The dismall'st day is this that e'er I saw,
To be dishonoured by my sons in Rome.
Well, bury him, and bury me the next.
(I. i. 384–386)
これほど悲惨な1日は俺はこれまでみたこともない、
ローマで自分の息子たちに名誉を辱められるとは。
仕方がない、やつを葬ってやれ、そして次には、俺を葬るがいい。

ここでタイタスが言おうとしているのは明かで、自分の名誉を否定されるぐらいなら、自分に死を与えよ、ということである。言うまでもなく、それは、ブルータスの特徴的な信念と全く同じものである。

今吟味したタイタスによる息子の埋葬許可は、実際は、やっと出されたものであり、これに先立って、身内の者たちによる先祖の墓への熱心な埋葬願いをタイタスが拒絶する場面が置かれている。タイタスの拒絶の理由は、戦争での名誉ある死を遂げた者が眠るところに、不名誉な死に方をした息子は葬れないというものである[2]。その理由にも、「名誉」とそれにからむ「死」の主張というタイタスの信念がのぞいているが、そこにみられる、相手の思いや意見を否定して自らの思いを推し通そうとするタイタスの性格的特性は、これまた、ブルータスに引き継がれているものである。タイタスとブルータスのそうした特性は、劇展開の中で実に何度も提示されている。それも、二人が登場する作品

2 『タイタス・アンドロニカス』第1幕第1場352–354行参照。

のどちらにおいても材源とは関係なく、シェイクスピアが独自につくった場面に認められる。

タイタスの第1幕からの例から先にみてみよう。まず、護民官を代表とするローマ市民から皇帝に推挙されたにもかかわらず、タイタスは自分がほしいのは老いの身を支える名誉の杖だとして断り、その代わりにサターナイナスを推薦している[3]。次につづくのが、タモラの息子のための命乞いを、戦死した息子たちの霊をいやすためだとして拒絶している部分である[4]。最後に現われているのが、既に触れた、自ら殺した息子ミューシアスの埋葬を不名誉な死を受け入れられないと主張して拒否している場面である。相手の言い分を否定してでも、タイタスが自己の思いを推し通す、このエピソードの連鎖によく似たものが、陰謀者たちがブルータスの家に集まる場面（第2幕第1場114–189行）にある。そこでは、キャシアスがシーザー暗殺の決意を誓言しようと言うのを、ブルータスが市民の苦しみや時代の弊で十分だとして反対している。また、シセロを仲間に入れようという同士たちの提案を、自らによる性格判断を根拠に退けている。そして最後に、アントニーを同時に殺害すべきだというキャシアスの主張を、祭壇に生贄を捧げる者になるべきであって、屠殺者になるべきではないという理由で否定している。二人を取り巻くエピソードの連鎖は、自説を押し通そうとする点で、このように相互によく類似しているが、合わせて注意すべきは、タイタスによるタモラの息子のための命乞いが主人公を復讐される者にしていることと、ブルータスによるアントニーの殺害への反対が葬儀の場面における市民の支持の逆転を招来することとに象徴されるように、その中心には、後になって二人の人物の悲劇を結果的にもたらす展開が含まれているという決定的な点でも、相互に似ているということである。シェイクスピアがタイタスに盛り込んだ性格描写をそのままブルータスでも利用したことになる。

3　『タイタス・アンドロニカス』第1幕第1場187–200行参照。
4　『タイタス・アンドロニカス』第1幕第1場121–126行参照。

しかしそのことは、劇作家の劇作展開に思わぬ方向をもたらすことになる。最後にその問題に触れておこう。

自説を押し通そうとする二人はそのことだけでも観客によって好意的に受け取られなくするが、エピソードが繰り返されることによって、タイタスやブルータスは自己へのプライドの高さばかりか、むしろ傲慢さに通じる性格を観客に印象づけることになっている。タイタスの場合、それで問題はなかった。というよりも、残酷劇の主人公に位置づけるために、観客とタイタスとの間に共感をできるだけつくらせないことが必要であり、そのために劇作家は高慢な主人公の性格を効果的に働かせることができたわけである。ところが、シェイクスピアがタイタスの高慢さをそのままブルータスに注ぎ込んだときに問題が起きたと思われる。ブルータスは残酷劇の主人公ではなく、正当な悲劇の主人公であり、観客の共感を必要としたのである。この問題をシェイクスピアはブルータスに独白を与えることによって解決しようとしたと考えられる。独白は、観客に人物に対する共感を起こさせるのに最も有効な手段の一つだからである。それは、劇作家が観客の共感をできるだけ避けようとしたタイタスの場合には、内的描写を可能にする独白が一つも与えられていないことをみれば納得されるだろう。その意味では、シェイクスピアはタイタスについては一切使わないことで、逆にその使用の意味を学んだ独白をブルータスに盛り込んだことになる。実際『ジュリアス・シーザー』では、観客がブルータスに好意を持つようになるのは、彼が妻や召使に示す思いやりを描いた場面もさることながら、それ以上に、暗殺を決意する、また、決意しながらも心の迷いをのぞかせる独白によるところが多い。残酷劇でこそ機能するタイタスの高慢な性格をそのまま正当な悲劇のブルータスにもちこんだことが、シェイクスピアに独白を使わせる思わぬ劇作展開をもたらしたといえる。そして、『ジュリアス・シーザー』が『ハムレット』の習作的な作品であることを考えると、それがハムレットにおける独白の徹底的な使用に繋がっていったことは容易に想像できることである。